

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02430

研究課題名(和文) 自己探究に基づくリフレクションへの志向性の形成を促すカリキュラムの開発

研究課題名(英文) Curriculum development to promote the formation of an orientation toward reflection based on self-inquiry

研究代表者

若木 常佳 (Wakaki, Tsuneka)

福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90454579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1カリキュラムの視点、2ツール開発、3教師教育者の専門的力量形成、4実習の事後指導を追究した。

1では自己探究に基づくリフレクションについての学びを教職課程コアカリキュラムから独立させる案を構築した。2では、「対話シート」に注目し、4段階の「対話シート」を作成し試行した。3では、オランダの教師教育の現場を視察から、学生自身が教育観を見つけ出すサポートの必要性を見出した4はリフレクションの深化を志向することを意図し、実習日誌に記した当初のリフレクションの結果を対象化して再リフレクション実施した。本研究を踏まえ、次年度から教師教育者の専門的力量形成の具体に取り組む。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は次の2点である。現代の日本の教育教師教育に不足する「自己探究に基づくリフレクションの志向性形成」という課題に対し、学部から教職大学院につながるリフレクションについての学びを独立させるカリキュラムを考案したこと、教職大学院でのリフレクションの学習の中に「人間の行動を導いている内的存在」(Korthagen 2010:51)と向き合うツールとして、「対話シート」の活用を提案したことである。

本研究は、教員としての到達を示す行為志向の「教員育成指標」等とは別の視座から教師の成長を捉え育てることに對する研究他律から自律への生き方の転換につながるものとして、社会的意義が見出せる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we pursued 1) curriculum perspectives, 2) tool development, 3) professional development of teacher educators, and 4) post-practicum instruction.

In 1), we developed a plan to make learning about reflection based on self-inquiry independent from the core curriculum of the teaching curriculum. In the 2), we focused on the "dialogue sheet" and created and tested a four-step "dialogue sheet"; in 3), based on an observation of teacher education in the Netherlands, we found the need to support students in finding their own view of education; and in 4), with the intention of deepening reflection, we targeted the results of the initial reflection recorded in the practicum journal and re-interpreted them. The results of the initial reflection in the training journal were used as the target of the re-interpretation. Based on this study, we will work on the specifics of professional development of teacher educators in the next fiscal year.

研究分野：教師教育

キーワード：教師教育 自己探究 リフレクション カリキュラム ツール開発 実習の事後指導 教師教育者の専門的力量形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究から教師自身の自律的な自己探究の必要性，それを支えるリフレクションについての学習と経験の集積が必要であると考えてきた。申請者の研究結果（基盤研究C 2017-2019年度）からも，リフレクションを阻害する要因が個人の資質だけではなく教師教育の内容や学校現場の組織に存在することが捉えられ，早期にシステマティックなリフレクションの学習が必要なことがわかっている。

しかし教師養成機関では即実践力の必要性を反映し，依然として教育技術の向上が重視され，リフレクションを継続的に学び，体得して習慣化するためのカリキュラムは示されていない。こうした状況から学部・教職大学院で継続的に行う〈リフレクションへの志向性の形成を促すカリキュラム〉についての研究を行い，我が国の教師教育の充実を図ることが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は，学部・教職大学院で継続的に行う〈リフレクションへの志向性の形成を促すカリキュラム〉についての追究である。具体として自己探究に基づくリフレクションへの志向性の形成を促すカリキュラムを開発し提案すること，それをサポートするためのツールや学習内容の開発である。

3. 研究の方法

本研究では，自己探究に基づくリフレクションへの志向性の形成を促すカリキュラムを開発するため，研究課題に対し，①自己の概念の追究，②カリキュラム開発，③ツール開発，④教師教育者の対応力からアプローチを行った。

①については，文献研究を行い，本研究における自己の概念を定義したのち，②③④を実施した。②③④については，自己探究のための学習内容や実習指導を実施するオランダの教師教育現場の視察，カリキュラムの一部と開発したツール「対話シート」を試行し検討・修正，試行から捉えた学生や院生から得た学びの履歴の精査を実施した。

4. 研究成果

(1) 〈自己の概念〉について

本研究における自己探究の自己については，次の3つの考え方を手がかりとした。1点めは，F. Korthagen らが提示した「人間の行動を導いている内的存在」，「ゲシュタルト」（2010:51）である。2点めは，自己に対し，「自己発達」と「自己形成」という段階性を設定する溝上慎一の考えである。前者は自己の状態に無自覚であること，それに対して後者は自己と他者を眺め直す過程を経ることにより，自己を意図的に育てようとするものである。3点めは，H. Harmans らの「対話的自己」である。これは人間の内面には多様な「me」が存在し，その多様な「me」の間を「I」が自在に動きながら「ポジション間の対話」を行い，その時にどのような解釈やどのような判断を行うかを決めるというものである。

これらの共通点は、「自己」がその人の歴史に依拠して成立することである。こうした「自己」に対し、自己探究を行うには、その人の「内的存在」である「ゲシュタルト」、「自己発達」した自己と対面する機会の設定が必要となる。

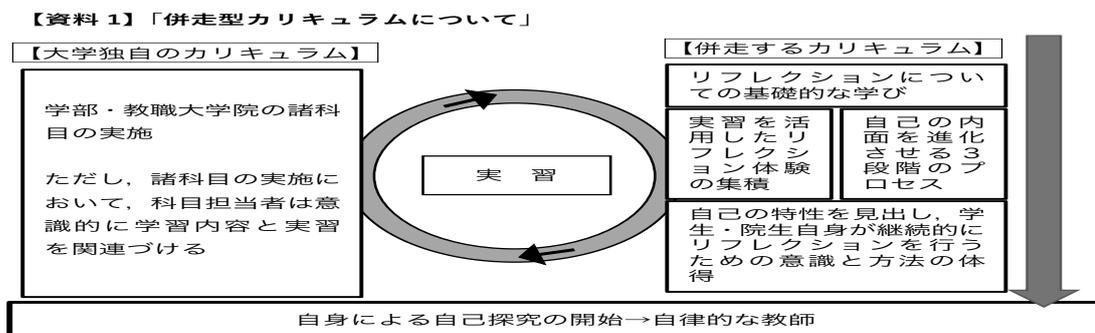
それらより、自己と対面する機会の設定の解明として、次の3つを行った。まず「自己」の自覚と「自己」の教育観や持っている枠組みの整理である。次にそれらが自分の選択・思考・判断に作用する実際場面を取り出し、自分の思考過程を理解すること、さらに自己の内部の「me」相互の対話から発生するジレンマに直面する体験、「自己」を捉え直しや自己の理解の深化・拡充のために他者と対話を行い、必要な「me」や関係する知の選択や獲得に向けた準備である。上記の意識的な対応を教師の養成機関の学習過程で意図的に学ぶためには、〈カリキュラム開発〉〈ツール 開発〉〈教師教育者の対応力〉が必要になる。

(2) 〈カリキュラム開発〉について

現在の教師教育のカリキュラムには、「教職コアカリキュラム」が反映されている。この「教職コアカリキュラム」の抱える問題に対し、高野和子（2021）や北田佳子（2022）の指摘がある。本研究は、本研究での提案は、高野と北田が指摘する体系性に関するものである。この体系性の問題を、本研究では〈断片的なカリキュラムの問題から、学生自身が学んだことの再整理の時間を持っていないことの問題〉として捉え直した。これにより、他者により、次々に多様な科目を重ねられたままではなく、学びの主体者自身が自己の学びを整理し、「人間の行動を導いている内的存在」と対話する時間を、カリキュラムに位置付けた。

それをイメージしたものが、【資料 1】の「併走型カリキュラム」である。【資料 1】の左側は、「教職コアカリキュラム」から導出される科目である。これらは大学固有の事情も反映されるため、〈断片的なカリキュラム〉ともなってしまう。それを実習という自己が教育現場に向き合う実際場面を介して、自覚的な自らの学びにするべく、右側にリフレクションについての学びを提示している。この右側のリフレクションについての学びは、学生・院生にとって「人間の行動を導いている内的存在」と対話しながら「自己形成」に向かう意識を持つだけでなく、その意識を継続する精神的な体力を体得することを意図している。この右側をどのように構築するかということ、それらが今後取り組むべき日本の教師教育の課題ともなる。

【資料 1】「併走型カリキュラムについて」



【資料1】の補足

【資料1】に記した「自己の内面を進化させる3段階のプロセス」とは、次のABCである。

A	自己の内面に位置づく多様な「me」の自覚
B	異なる考え方や立場の多様な「me」との意見交換による葛藤やジレンマへの対応力育成
C	自覚的な「自己形成」に向かうために必要な「me」の獲得

また、その詳細は、次のものである。

A	a 「me」を見直し、「自己発達」した無自覚な自己を意識的に見つけ出す b aの背景、環境を知る c 自己の特性を認識する
B	a 世界を知り、他者を知り、自己の特性を踏まえて、自身が教育に対してすることは何かを考える b なぜそれをする必要があるのかを考える。 c 自分と取り巻く環境の整合性についても考える d 自分が自覚して「自己形成」に向かい、自分が必要な「me」として位置付ける他者を見つけ、手を伸ばす（「対話シート」等の活用）
C	a その「me」で選択・思考・判断を試み、繰り返して自己の中に取り込む（自己化） b それを活用する c それを加えた「対話的自己」の状況を眺める

(3) 〈ツール開発〉について

自己探究に培うツールとして開発する「対話シート」は、自らの教師としてのありようを俯瞰し、どのように自己を育てていくかを考えるためのものである。それは「自己を知る(self as knower)」という機能を持つだけでなく、「『Me』にポジショニングして、ポジショニングした『Me』から世界を見ること」や自己の中に位置づく「他の『Me』に語りかけ」（日本教師教育学会 31 回大会発表資料より）ている自己を自覚しながら自らの在り方を模索することも求める。その過程では、リアリスティックにその場の事実に基づいて自己の思考を捉えること、事実を振り返り、集積された自己の思考を眺めながら、現状の自己や生じるジレンマについて認識し、どうするかについて試行が行われる。これは「教員育成指標」のように、求められる項目が示され、その達成を確かめるという「適合志向」のものではない。この「対話シート」は、岡山大学で当初活用されていた授業力と子ども理解で構成されたものをスタート地点に置いている。本研究では、自らの教師としてのありようを俯瞰するという目的を踏まえ、現在研究チームのメンバーが、それぞれの所属機関で対面する学生・院生、加えて現場の教師を対象として、内容や構成を考案した。その中では学部・教職大学院、学校現場という学びの履歴に従って形態や内容を変化させる(学部3年、教職大学院M1とM2、学校現場での活用の4段階の構想)ものも考案され、活用の具体と院生の記述内容から「対話シート」の「自己探究に基づくリフレクションの志向性形成」に対する有効性と活用上の課題を明らかにした。この「対話シート」による自己探究は、今後どのように自己を育てていくかという「自己マスタリー」に繋ぐ必要もある。(参照 「自己探究に基づくリフレクションをサポートするツールの開発-対話シート」)

(4) 〈教師教育者の対応力〉について

これは、教師教育者の学生・院生の成長との関わり方である。教師教育者とは、大学等の養成機関の教員に限らず、実習に関わる学校現場の教員も当然含む。教師教育者対応は、teaching か、coaching ということ、Biesta のいうところの「主体化」「資格化」「社会化」も関わらせて考える必要がある。「職業的自己」「職業的社会化」の発達を優先する場合であれば、「資格化」「社会化」を背景とする teaching が主となるであろう。しかし、本人が自己と対話しながら自己のありように気づき、そうした自己をどのように育て、どう生かすかを考える「主体化」に働きかけるならば、まず、Korthagen らが述べるように、教師教育者が教師の選択・思考・判断の背景にある「内的存在」、「ゲシュタルト」との往還を重視する必要がある。その上で教師教育者は empathy を働かせながら相手と対話し、相手の考えやこれまでの体験を理解しようとするとともに、本人の潜在能力に対して働きかけ、それを引き出したり開発したりする coaching 的振る舞いが必要になる。これは自分とは異なる歴史を持った人間として対等な立場に立脚してその人の実践や言動、思考を理解した上で、その人だけでは気づかない視点を提示する「Critical Friend」としての振る舞いであり、徹底した他者尊重に支えられる。こうした coaching 的振る舞いと徹底した他者尊重は、実は、子どもと教師の間にも求められ、優れた教師教育者であることと、優れた教師であることは類似するものである。

現在の課題として、学部での教育実習は「資格化」「社会化」に軸足を置くことが多い。そしてそれに馴れた教師教育者には coaching 的振る舞いは簡単ではない。院生にも教育実習の記憶が刷り込まれ、学校における実習との相違が不明確な場合もあることが調査によっても捉えられた。教師教育者は自己が育てられたありようを 意識して脱却すること、院生にもその促しを行う必要がある。

2023 年の 3 月と 2024 年の 2 月にオランダで実施した調査によれば、学校現場の教師教育者に対するトレーニングが行われていること、“将来の同僚を指導するには、指導スキルとは異なるスキルが求められるため、実習コーディネーターはそのための準備コースを受講することが求められる”ことがわかった。今後は、共感・肯定しながら必要なフィードバックを促す教師教育者の具体的な振る舞いについて、オランダの教師教育の現場を参考として探究し、学校現場の教師教育者に対するトレーニングの具体を明らかにする予定である (24K056688 自律的な教師の自己成長に培う教師教育者の専門性開発と育成に関する研究)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 若木常佳	4. 巻 72
2. 論文標題 自己探究に基づくリフレクションをサポートするツールの開発 「対話シート」を活用した教職大学院の実践事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 193-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原顕	4. 巻 11
2. 論文標題 小学校教育実習事後指導における学生のリフレクションの深化（1）：指導プランの構想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 橋本多加志 宮本浩治	4. 巻 13
2. 論文標題 学校を基盤としたカリキュラム開発を担う教師の役割と力量形成についての実践的研究 実践的リーダーとなる教師の主体から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原顕	4. 巻 10
2. 論文標題 若手教師の成長に関する研究動向の検討-実践知の形成に焦点化して-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若木常佳	4. 巻 71-4
2. 論文標題 教師養成期間における実習に関する研究-自己探究に基づくリフレクションを位置付けた実習内容の提案-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 285-295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原顕	4. 巻 9
2. 論文標題 自己探究に基づく教師のリフレクションの在り方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若木常佳	4. 巻 70
2. 論文標題 教師養成期間における実習に関する研究-学生の体験に着目して-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 231-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤原顕
2. 発表標題 初任期教師の実践知の形成：本学卒業生を対象とした事例研究
3. 学会等名 福山市立大学児童教育学シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若木常佳 藤原顕 宮本浩治 矢野博之
2. 発表標題 自己探究に向かう教師のリフレクション - 「対話的自己」を観点としたカリキュラム開発の試み -
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 若木常佳
2. 発表標題 リフレクションの継続的実施の課題と手がかかり
3. 学会等名 日本教師学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本教師教育学会 第10期国際研究交流部 百合田真樹人, 矢野博之編訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192
3. 書名 ユネスコ・教育を再考する : グローバル時代の参照軸	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮本 浩治 (MIYAMOTO kouji) (30583207)	岡山大学・教育学研究科・教授 (15301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	矢野 博之 (YANO Hiroshi) (40365052)	大妻女子大学・家政学部・教授 (32604)	
研究分担者	藤原 顕 (FUJIWARA Akira) (60261369)	福山市立大学・教育学部・教授 (25407)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関